

茨城県美術展覧会会員

水谷 勉

総評

審査は個々の作品を読み取ることから始め、そこから訴えかけてくるメッセージに耳を傾け、慎重に進めてまいりました。写真は、自分ものの見方や考え方を映像で記録し表現することにあります。従って、何を見て、何をどのように表現しようとするかがとても大事な要素となります。ともすれば、ただ作品づくりに心が先走り遂に自分を見失いがちになりますが、心して撮影に取り組んでいただきたいと思います。タイトルは、作品の価値を決めランクアップさせることができます。大切に。

村長賞 『父ちゃん早く』 星 豊

首を長くして待つ小鳥に餌を与えようとする親鳥の姿は美しい。周囲のシチュエーションも素晴らしく、まさに王道を行く感がある。妥協を許す気配は微塵もない。力まず、語らず、内面に視点を誘い込むタイトルを。

村議会議長賞 『ときめく』 成田 富夫

祭りの写真はむずかしい。咄嗟のひらめきが見事だ。馬の昂ぶりと
落ち着いたある若い女性の表情を、絶妙のタイミングで捉えている。
シャッターを切る瞬間の緊張感が強く伝わってくる。

教育長賞 『水中散歩』 渡邊 正人

臨場感のある作品。組んだ一枚、一枚にスリリングな緊張感が表現され、
作者の懸命なカメラワークが強く伝わってくる力作。今後の活躍が
楽しみである。

奨励賞1 『R i v e r in 桜』 河野 弘

6年後のオリンピックを控え、変貌を遂げようとしている東京への
眼差しは、今どきを見つめる時代性の高い作品と言える。作者の
きめ細やかな視線の先の桜の印象が深い。

奨励賞2 『「わあ〜」すごい』 川口 克雄

抽象的な作品だが、画面全体に強い視覚的エネルギーが表現されている。
モチーフを発見する眼と表現力から作者の美意識が見えてくる。

奨励賞3 『願い』 本田 和男

作者独自の世界を見つめる眼差し、構図と露光が、この場の静謐な情感をサポートしている。被写体に対する作者の感情移入の試みが見て取れる。静かな力作。

奨励賞4 『雪が降る』 岩谷 キイ

写真は、出会ったときの瞬間のひらめき、そして、自分の思いを頂点にまで持っていかないと、人に伝わる作品にはならない。現場での作者の心の揺らぎが見える。モノクロ調の色調が情感を呼んだ。

奨励賞5 『苔むす大樹』 渡邊 二男

森のなかの神秘が、レンズの画角によって力強く表現されている。昨今の地球環境の観点からもとても大事なテーマである。モチーフを発見する眼と写真意欲の逞しさを感じます。

佳作1 『五月の風』 会沢 かほる

風をはらんだ鯉のぼり、青い空に白い雲。屈託のないストレートな眼差しが、五月の爽やかな風と、空気感を捉えた。写真の本質を見た。

佳作2 『祭り童子』 高杉 則子

写そうという意識を写さず、ただその場の状況をさっと掬い取った感じが読み取れます。見る人に祭りの子の笑顔が届きます。作者の優しさが届きます。

佳作3 『ウォーターランド』 黒澤 芳枝

画面いっぱい広がるブルーの色調、そしてハイライトからシャドーに至る階調がドラマチックに表現された。フレーミングにやや難が残るが、作品にまで昇華した想像力が見事である。

佳作4 『古を訪ねて』 清水 行雄

被写体はそれぞれに物語を持っている。写真は、その物語を表現しなくてはいい作品とは言えない。トンネルの出口のシルエットからドラマは始まる。

佳作5 『秋日和』 加藤 勉

写真は被写体至上主義だから、いかにいい被写体にめぐり会えるかがポイントとなる。人物の位置に始まる画面構成、コキアの色調に関わる露出の設定など、作者の写真認識度は高い。